

「本陣庭園」と「出雲流庭園」

「庭園文化研究分科会」 武田 隆 司

1. はじめに

今年度は、「奥出雲のたたら御三家の庭」と銘打って、たたら製鉄によって繁栄を極めた鉄山師、田部家、櫻井家、糸原家の3箇所の庭園を視察した。奥出雲の庭に触れたのは平成19年度に研究部会「田舎ツーリズム」の視察に訪れた際、歴史を感じさせる土蔵群の脇から見えた田部家庭園のシダレザクラの大木であった。地域の資源として奥出雲の庭を調べるうちに「出雲流庭園」というキーワードに遭遇した。これが本分科会の活動のきっかけとなった。今年は非公開の田部家の庭の見学が可能となったことから、分科会として改めて3氏の庭園の視察を行うことになった。

今回の視察は（一財）日本造園修景協会島根県支部（造園修景に関わる産官学の人々で構成された団体）との共同開催であったが、その中の一人の造園家の方との話の中で「本陣庭園」という言葉を耳にした。糸原家、櫻井家、あるいは出雲流庭園を総じて呼んでいるようにも感じた。これまで分科会で出雲流庭園をいくつも視察してきたが、本陣庭園という言葉は聞くことがなかった。この二つの庭園様式は同一のものなのか、違うのか、今回は「本陣庭園」と「出雲流庭園」の関係性に注目した。

2. 本陣とその庭園

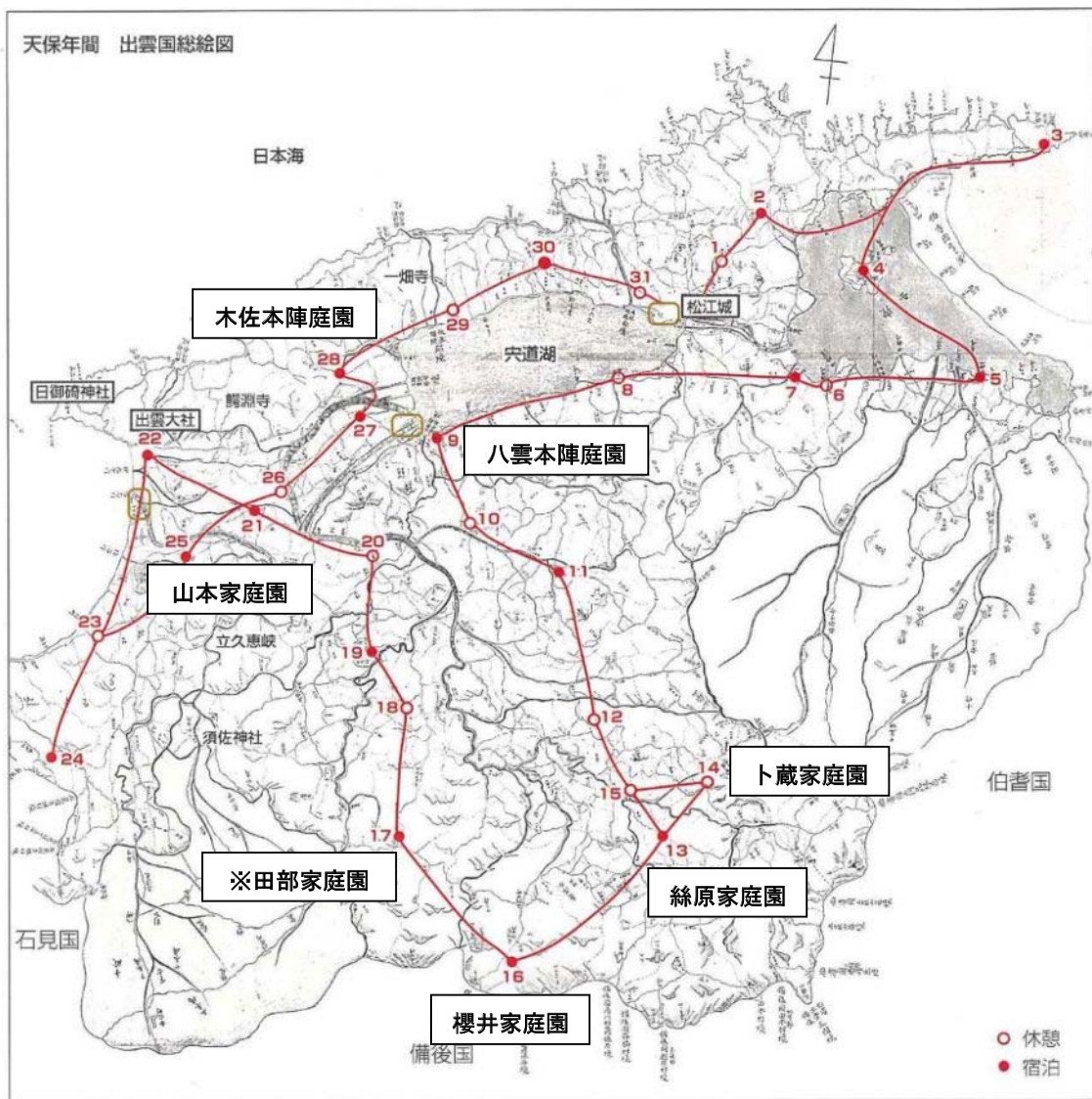
一般的に本陣とは、参勤交代で通行した街道の宿場町にあった諸大名の宿所のことであるが、松江藩領内に設けられた本陣は、松江藩主が領内を不定期に巡察する際に利用した宿舎であった。巡察の目的は祈願、視察、鷹狩り、領民生活文化の高揚等であったとされる。道筋は宍道湖の北回りと、南回りの2コースがあり、行程は1～2週間、総勢60～70人であったようである。主要街道に面した大型の民家が本陣に充てられていた。このような団体を受け入れて接待するためには相当な財力を持つていなければならなかったであろう。藩主は御成門と呼ばれる専用の門から駕籠のまま庭に入り、庭から書院造りの客座敷に上がっていたとされる。このころすでに本陣には庭が備えられていたわけであるが、七代藩主松平不昧が最初に奥出雲の櫻井家を訪れたのが1803年で、現在も残る客座敷と庭はそのために整備されたとされることから、不昧の茶道の影響を受けたとされる、いわゆる出雲流庭園の発生は這個時候であることが推測される。



糸原家庭園（奥出雲町）

下図は、藩主の巡察コースの想定図（出典：「格式と伝統 出雲の御本陣」）に当方の平成 24 年度の研究レポートから出雲流庭園の特徴が見られる庭を記したものである。今年度視察した櫻井家、絲原家の他、これまでの視察地の本木佐本陣、山本家、八雲本陣（図では 9. 御茶屋）などが見られる。本陣に備えられた庭園を本陣庭園と呼ぶのであれば、その多くは出雲流庭園の様式を持っているといえる。やはり本陣庭園＝出雲流庭園としてよいのだろうか。

なお、※印の田部家庭園は、江戸末期（1865年）の大火で消失しており、現在の庭園は藩主巡察の時の庭ではない。



- | | | | | |
|-------------|--------|-------------|------------|-------------|
| 1 久保田家 | 2 木村家 | 3 美保関神社 | 4 安部家 | 5 御茶屋 |
| 6 岡村家 | 7 御茶屋 | 8 福庭家 | 9 御茶屋 | 10 今市屋 幾右衛門 |
| 11 んるや 小左衛門 | 12 人家 | 13 絲原家 | 14 卜蔵家 | 15 岩田家 |
| 16 櫻井家 | 17 田部家 | 18 多久和酒屋 | 19 灰吹屋 | 20 金山家 |
| 21 遠藤家 | 22 藤間家 | 23 油屋 太郎右衛門 | 24 奥田儀 櫻井家 | 25 山本家 |
| 26 山田家 | 27 勝部家 | 28 木佐家 | 29 池尻家 | 30 奥原家 |
| 31 蔵右衛門 | | | | |

2. 本陣の庭の手法について

1) 茶道の要素

藩主の御成を向かえるに当たり、書院座敷や庭園を美しく整えることは室町時代から行われていたとされ、江戸時代になり茶道の要素が取り入れられるようになったとされる。飛び石や灯ろう、つくばい、茶室などがそうである。出雲地方では茶道に造詣の深い松平不昧が巡察をはじめたころ、江戸後期（1803年）に本陣の庭に本格的に茶道の要素が導入されたと思われる。その頃には松江藩の各所には豪農や豪商が台頭し、藩主を茶の湯で接待していたのであろう。茶道の要素は出雲流庭園の必須の要素にもなっている。

2) 御成門

御成門は文字通り藩主のみが使用する門であり、これを築造するには藩の許可が必要であったとされる。現在でも御成門は一般には開放しておらず、絲原家のように開放されているところは珍しい。田部家の御成門は大火後に再築されたものであるが、代々の当主の襲名披露の際にのみ開放するらしい。これらは本陣の庭の入口であり、藩主はまずここから入り、庭を歩いて客殿に上がっていたようだ。御成門は贅を尽くしたものが多く、その家の格式を現している。

また御成門からは庭の最初の景色が見えるため、ここからの視線を意識した庭の造りになっていたと思われる。出雲流庭園の中潜り門からの期待感を高める庭の見せ方「額縁技法」もここから発生したものかもしれない。

八雲本陣御成門



櫻井家御成門



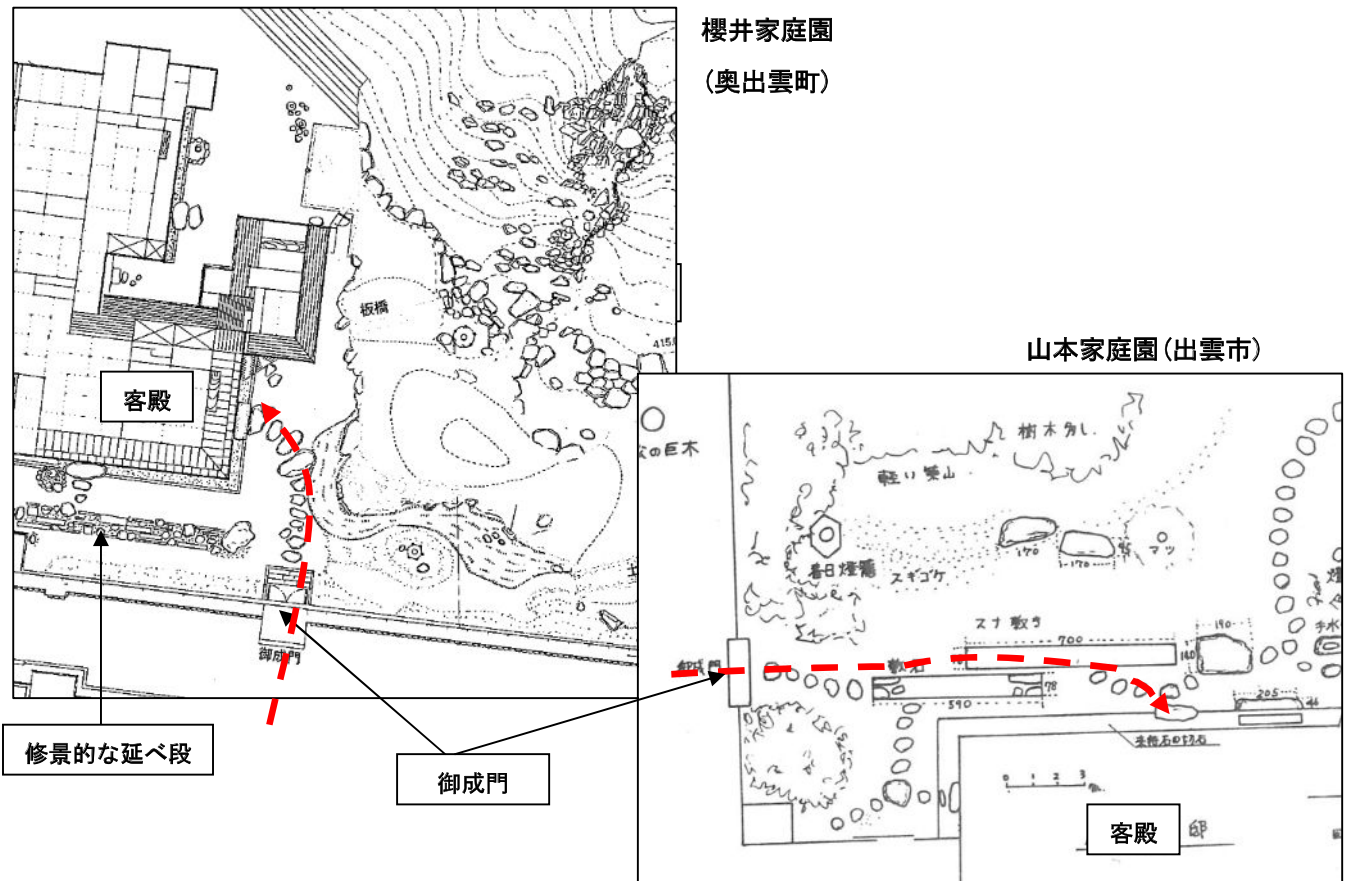
絲原家御成門



3) 飛び石と動線について

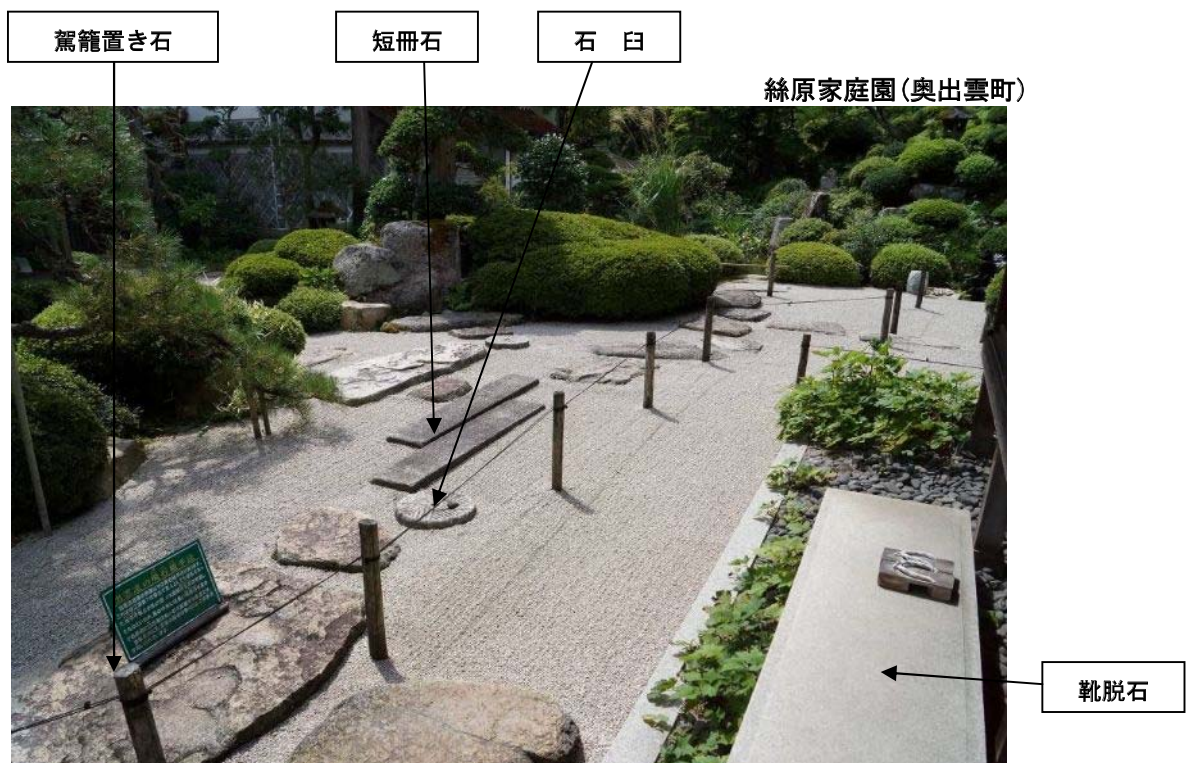
「島根の庭」（（社）島根庭園協会）の中で島根県を代表する作庭家の座談会の様子が掲載されていた。この地方の庭に関する興味深い話が多く出てきた。「もともと書院式の庭には飛び石はなかった。ある藩主が鷹狩りの帰りに庭を訪れた時、あまりにもきれいに砂が敷かれていたため、歩くのを遠慮されたことから、その後飛び石が置かれるようになった。」とのこと。本来飛び石は茶庭などにおいて人の動線を誘うものであり、機能的なものであった。殿様の駕籠は御成門の前で一度止まり、駕籠の中から門越しに期待感のある風景をいちべつし、庭中央部で駕籠を降りてひととおり庭を観賞したのであろう。その後客殿に上がり、茶の湯を楽しみながらゆっくりと庭の全景を楽しんでいたのであろう。次図のとおり櫻井家、山本家庭園の御成門から客

殿までの飛び石は非常にシンプルで最短距離の動線となっている。櫻井家の庭も一見池泉を回遊するように見えるが、それは後に庭園内に設けられた茶室への動線として追加されたものであり、基本動線は御成門を起点に客殿正面と並行に並べられた飛び石であったと思われる。このような並びは出雲流庭園の特徴でもあり、客殿内からの眺めの中では修景要素としてこの飛び石の造形に工夫を凝らしている。櫻井家の場合は、山本家のように客殿正面に大きな短冊石を置くスペースがないことから、南側にあえて見栄えのする延べ段を修景的に設けたとされる。



4) 飛び石類の役割

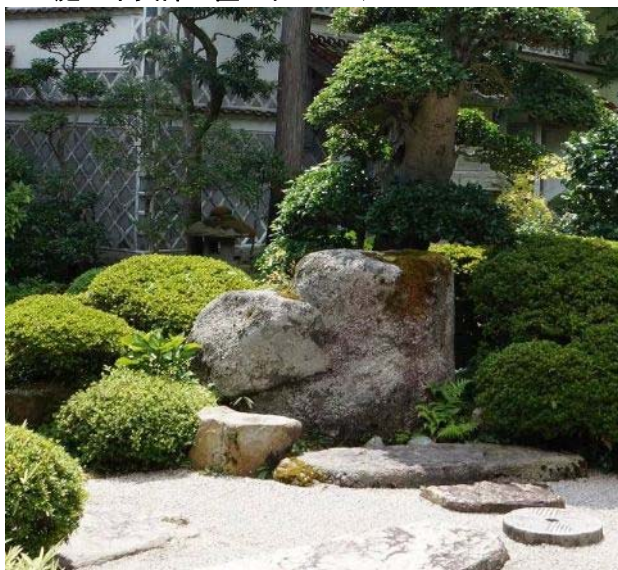
庭中央部の一段と大きな石は、「駕籠置き石」と呼ばれ、殿様はここで駕籠を降りたとされる（次頁写真参照）。各種文献で見ると駕籠の大きさは乗る箱の部分が1m四角程度であるが、担ぐ柄の部分は長さが2m程度ある。殿様の駕籠は前後2人ずつで担いでいたかもしれない。駕籠置き石前後の飛び石の直線的な配置は理にかなっているような気がする。また、飛び石が総じて大きなものが多いのは、駕籠かきや殿様が大股で歩いていたためであろう。短冊石は普通の飛び石よりも歩きやすく、駕籠も揺れにくかっただろう。前述の座談会では「駕籠置き石の近くに石臼の飛び石があるのは、檜を立てておく石として使ったらしい。」との話も出てきた。その情景が浮かんでくるようだ。本陣庭園の飛び石と一般的な茶庭の飛び石のちがいはこのようなことから生じていると思われる。



5) 灯ろうやつくばいの配置

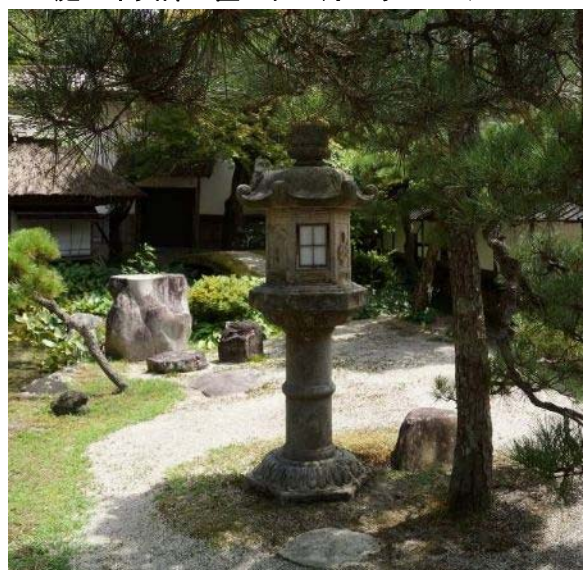
本陣の庭の中には、庭の中央部に存在感のあるつくばい（茶道の際に手を洗うもの）を配置している場合が多く見られる。これは出雲流庭園にも見られるもので、現在では修景物としての機能が強い。前述の座談会の中では、「一般に灯ろうは露地の庭に置くもの、書院式の庭ではつくばいは軒下に置くものだが、庭の中央に置くのはこの地方の庭独特のものである」という話も出た。これも殿様が御成の際、駕籠を降りて近くのつくばいで手を洗いその後に客殿に上がったことによるものかもしれない。夕方に到着された場合は、庭に灯りも必要であったであろう。

庭の中央部に置かれたつくばい



絲原家庭園 (奥出雲町)

庭の中央部に置かれた灯ろうとつくばい



櫻井家庭園 (奥出雲町)

3. 出雲流庭園と本陣庭園の関係

出雲流庭園が成立した歴史的背景をおさらいしてみると、江戸の後期に松江藩の農業振興の藩政により大地主制が進んだことにより豪農が出現、また奥出雲地方では田部氏や櫻井氏のようにたたら製鉄により富を得た豪商が出現した。江戸の末期にかけて藩との交流が盛んとなり、巡察の際には本陣として藩主をもてなす場として庭が作られ、その庭には松平不昧の影響で茶道の要素が色濃く出てくるようになった。このころまでの庭はまさに本陣庭園といってよいであろう。当時は贅沢品である庭園を作ることは一般には許されず、本陣にのみ特別に灯ろうやわずかな景石の設置を許されていたとされる。このことは出雲流庭園が松江藩内のみに分布する大きな理由でもあるだろう。このような本陣庭園の様式をベースに、出雲地方の風土などが加わり、明治以降、一般庶民にも庭園が広がり、斐川原鹿豪農屋敷庭園（江角家）のような様式になっていったのであろう。大きく出雲流庭園として見た場合、本陣庭園はその原形であり、より機能的な様式であるといえる。そこから庶民に広がる中で、修景を重視するとともに庶民にも整備可能な様式に落ち着いていったものと思われる。

4. おわりに

今回の視察は、分科会メンバーの他、（一財）日本造園修景協会員も含めると計22名の参加があった。やはり「非公開の田部家の庭」に魅力を感じる人が多かったのであろう。山陰中央新報社でも同様のツアーを10、11月に企画し、9月初めの時点で、4回（定員25名）のうち11月の2回は定員に達していた。日本文化遺産に指定されたたたら文化や紅葉の時期の影響もあるが、「たたら御三家の庭めぐり」といううたい文句は一般の人々にも引きつけられるものがあるようだ。テーマやストーリーを持たせることで庭への期待感を高めることができる。これまで分科会で視察してきた庭園についても、「殿様の訪れた本陣の庭めぐり」、「不昧の愛した茶庭めぐり」、「簸川の豪農の庭めぐり」、「出雲の商家の庭めぐり」、「禅寺の庭めぐり」、「様々な出雲流の庭めぐり」等、魅力的な切り口が考えられる。

また今回の視察では、それぞれの管理者の方々に庭の解説をしていただいたが、一族や建物にまつわる話が多く、庭に関してはパンフレットに掲載されている程度の内容であった。特に田部家は櫻井、絲原家とは全く異なる様式の庭であり、その作庭のいきさつなど興味津々であったが、多くの情報を得ることはかなわなかった。むしろ今回同行した（一財）日本造園修景協会の作庭家メンバーの話が前述の著書の座談会のように興味深かった。このような専門家による「庭園ガイド」が庭の魅力を発信する上では重要であると考えられる。

<参考文献>

- ・ 格式と伝統出雲の御本陣（藤間亨著）
- ・ 出雲流庭園 歴史と造形（小口、戸田著）
- ・ 櫻井家住宅調査報告書（奥出雲町）
- ・ 40周年記念島根の庭（島根県庭園協会）